

暗い過去を乗り越えて

史蹟史料部所属 歴史友の会 幹事

杉野 一夫

デヴィッド・マーシャル元主席大臣

1995年、太平洋戦争終結50周年にあたる年の9月18日、私はデヴィッド・マーシャル氏のお宅を訪ねる機会に恵まれた。彼は1942年、日本軍の侵攻に対抗する義勇兵として戦い、その後捕虜(POW)となり、北海道の捕虜収容所へ送られた。

1955年、シンガポールはイギリス植民地政府から教育、保健、住宅、商工の自治権が移譲された。これを受けて選挙が行われ、その結果、労働戦線党(Labour Front)が第一党となり、その党首であったマーシャル氏が主席大臣(Chief Minister)に就任した。マーシャル氏は政権につくと、日本企業2社に会社開設許可を出した。彼が日本企業に門戸を開いたことで、シンガポールと日本の関係は再開され、日本企業の進出と日本人居住者の増加につながった。そして1957年、日本人会(JAS)が再発足した。

彼が癌と闘っていることを知った私は見舞いの花を贈った。数日後に届いた礼状には、1955年、彼がシンガポールの主席大臣であった時に、東京銀行(後に三菱UFJ銀行の一部)と三菱商事にシンガポールでの支店開設を許可したことを覚えていると書かれていた。この手紙に私は強い興味を抱いた。というのも、この許可が日本企業のシンガポール進出の端緒となったからである。そこで私は、恐るおそる彼を訪問したいと願い出た。

彼が一人掛けのソファにやつれた様子で座っている姿を見て、胸が痛んだ。私は遠慮がちにインタビューを試みた。

私は、彼の捕虜としての経験を尋ねた。彼は、冬にはマイナス20度以下になる厳しい寒さを思い起こした。

彼はこう言った。

「ただ耐えるしかなかった。まともに着る服もなく、タイヤを切って紐で結び付けて靴にしていた。食べるものもほとんどなく、最後の冬を越せるかどうか本当にわからなかった」

「私は40ポンドのハンマーで満州から運ばれた鉄鉱石を毎日叩き割る仕事をしていました」

終戦時、アメリカ軍の飛行機がチョコレートやクッキーなどの食料が詰まったキットバッグを収容所に投下した。

マーシャル氏はこう回想した。

「飢えに苦しんでいたのは我々だけではなく、地元の人々も深刻な食糧不足に苦しんでいました。そこで私はチョコレートやクッキーを子どもたちのところに持って行って分け与えました。」

1942年2月から1945年9月までの日本占領期、シンガポールの多くの人々が過酷な扱いや強制移動、離別、さらには殺害にさらされた。マーシャル氏自身も北海道で厳しい捕虜生活を強いられた。それにもかかわらず、1955年に主席大臣となった彼は日本企業の進出を許可し、日本人の回帰を可能にした。

当時どのような気持ちで、どんな理由でこの決断をしたのか尋ねると、彼は答えた。

「日本はいずれ自立すると思っていました。そして中国共産党の台頭を恐れていた。日本が力をつければ、反共勢力の重要な一角になると信じていたのです。だから東京銀行と三菱商事に許可を出したのです」

私は尋ねた。

「閣僚の中に反対意見はありませんでしたか？」

彼は答えた。

「反対はありませんでした。しかし、許可が新聞で報じられた翌日、マレーシアの初代首相トウク・アブドゥル・ラーマンから電話があったのです。」

『デヴィッド、お前は裏切り者か？ 戦争のことを忘れたのか？』とね。

それから40年、日本は見事に復興しました。小さなシンガポールがその一助になれたことを私は嬉しく思っています。」

アメリカ軍機の投下したクッキーやキャンディを両腕に抱えて子どもたちに届ける彼の姿を想像すると、そこに敵、味方の区別などなかっただろう。ただ、自分と同じように飢えた子どもたちがいて、笑顔でクッキーを食べる姿を見たいと思ったのだ。あの瞬間、彼は家族のもとへ帰れる喜びとともに、未来のシンガポールを思っていたに違いない。

マーシャル氏は友情を重んじ、憎しみを煽る政策に断固反対する人物であったと言われている。私は、彼の人道的信念と未来志向の姿勢こそが、日本企業の進出を許可する決断に導いたのだと信じている。

ボランティア活動

戦後間もなくシンガポールに赴任した日本人駐在員とその妻たちは、シンガポール人の心には占領期の苦い記憶が深く残っていると感じていた。日本人社会には、その償いの気持ちを何らかの形で示したいという思いが強かった。

日本人会再発足後まもなく、婦人部が結成され、翌年には日本大使館の呼びかけで国際チャリティ・バザーに参加した。婦人部の組織が強化されると、1968年には独自のチャリティ・バザーを開催できるようになり、同時に社会奉仕活動へとその範囲を広げていった。

1987年12月のある日、私は大統領府から電話を受けた。イスタナ(大統領官邸)を訪れると、秘書から、ウィー・キムウィー大統領が日本人の社会奉仕ボランティアを全員招待して、お茶会を開きたいと考えていると知らされた。

ウィー大統領は1980年から1984年まで駐日シンガポール大使を務め、シンガポール帰国後すぐに日本人会は同氏を名誉会員に招聘した。彼は日本人会の月報から、多くの日本人女性が福祉団体にボランティア活動をしていることを知り、その熱心さに深い感銘を受けていたのである。

1988年1月9日土曜日、122名のボランティアのためにバス4台を手配し、イスタナへ向かった。ファースト・レディのコー・ソク・ヒオン夫人が、ニョニャ菓子とコーヒー、紅茶を用意して下さっていた。大統領夫妻は会場に入り、ボランティア一人ひとりと握手し、ボランティア活動の労をねぎらわれた。

大統領は新任日本大使への信任状捧呈式の間で常々こう述べていたという。

「老人ホーム、身障者施設等々、こうした福祉団体を定期的に訪れ、みずから汗を流して尽力される奉仕活動こそ何物にも代えがたい有難い社会貢献です。多くの日本人女性が長年にわたってボランティア活動を続けておられることに深く感謝します」

この温かい言葉は、社会奉仕に携わるボランティアたちにとって大きな励ましとなった。

その後、1995年から活動していたアシシ・ホーム&ホスピスでの奉仕が評価され、2002年に日本人ボランティアはイスタナにおいて大統領社会奉仕賞(President Community Service Award)を受賞した。

2008年10月9日、第24回コミュニティ・チェスト表彰式がイスタナで行われ、日本人会はナザン大統領からピナクル賞を受賞した。これはコミュニティ・チェストが社会福祉団体を支える組織に与える最高の賞である。

1983年の設立以来、日本人会は300万ドル以上をコミュニティ・チェストに寄付し、100名以上の会員が10の福祉団体に長年ボランティア活動を続けてきた。ピナクル賞を受賞したのは、日本人会で6団体目、しかも外国の組織としては初めてだった。

授賞式でコミュニティ・チェストのジェニー・チュア会長はこう述べた。

「日本人会は初めてピナクル賞を受賞した外国団体です。多くの会員が短期駐在の家族であるにもかかわらず、24年間にわたり継続して寄付を行い、21年間一度も欠かすことなく法人金賞(Corporate Gold Award)を受賞しています。Arigatou gozaimasu！」

リー・クアンユー初代首相

1980年、リー・クアンユー初代首相は「日本に学べ」運動を提唱、日本政府に技術移転と生産性向上の支援を訴えた。リー氏は戦後目覚ましい復興を遂げた日本から多くのものを学ぼうとしていた。この「日本に学べ」運動によってシンガポール人の日本への見方は大きく好転した。

日本に学べ運動をさかのぼること18年前、1962年、東海岸地域の一角シグラップの住宅造成地から大量の人骨が発見された。シンガポール中華総商会は、それが日本占領期の「粛清」の犠牲者だとして日本に補償を求めた。

当時、中国系住民が受けた日本軍の残虐行為を考えれば、これは当然の反応だった。

他方、リー首相は、戦争賠償問題について英国はサンフランシスコ講和条約を日本と結んだ際に処理されており、既に解決済みだと国会で説明し、激昂する中華総商会とは一線を画し、抑制的だった。シンガポールと日本の関係強化の必要性を念頭に置きながら、穏便な解決を目指した。日本国政府と水面下で交渉を進めていたが、日本側から交渉内容が暴露されてしまった。この不用意な発言はそれまでこの賠償金請求運動に慎重だったリー首相を怒らせてしまった。1963年にシンガポールがマラヤと合併してマレーシアの一州となると、交渉権はマレーシアのアブドゥル・ラーマン首相に移った。1965年8月にシンガポールがマレーシアから独立した後も交渉は続き、1966年10月、日本はシンガポールに2500万ドルの無償援助と2500万ドルの借款を提供することで合意した。

リー首相は、1967年に佐藤首相の来訪、1970年に皇太子同妃殿下の行幸を実現させ、これを契機に日本・シンガポールの関係強化は加速していった。

その後も両国の関係は着実に改善し、1979年から1991年の間、日本政府はシンガポール政府の要請に応じて、日本・シンガポール訓練センター(JSTC)、シンガポール国立大学の日本研究学科、日本・シンガポール・ソフトウェア技術研修学院(JSIST)、日本・シンガポール技術学院(JSTI)、日本・シンガポールAIセンター(JSAIC)等々の設立を支援した。日本の支援は、シンガポールがOECDにより「先進国」と認定された1996年の少し後、1998年まで続いた。

良好な関係を未来へ

1962年、賠償問題が深刻化したとき、シンガポール在住の日本人たちは不安の中で暮らしていた。一部はホテルに避難し、シンガポール政府は警察を動員して彼らを守らなければならなかった。当時の日本人から見れば、現在の両国関係は夢のように映るだろう。

これは、両国の暗い歴史に正面から向き合いながら関係改善に尽力した日本人先達、そして未来志向で日・シ関係を築こうとしたシンガポールの指導者たちの存在があったからこそ実現したものである。

マーシャル元主席大臣、リー・クアンユー元首相の物語を振り返ると、その知恵は現実主義と未来志向に基づいていた。また、日・シ関係を重視し、関係強化に尽力した多くの企業人や政府関係者の存在も大きかった。

自国の未来を見据えながら日本との関係を大事してきたシンガポールのリーダーたち、負の遺産に真正面から向き合いながら地道な努力を重ねてきた我々の先人たち、こうした人たちの熱意と努力を手本とし、これからも両国の関係をより強固にしていく羅針盤としていきたい。

(2025年4月出版の「The Land of the Rising Sun and the Lion City」に寄稿した“Overcoming the Dark Past”の日本語版、若干の修正を加えた)